

【報告】

第4回「卒業生の保健師の集い」をふりかえって

鈴木知代* 若杉早苗** 宮地俊行*** 中野照代*
藤生君江* 入江晶子* 仲村秀子* 富安真理*

* 聖隷クリストファー大学 看護学部

** 榛原町役場

** 静岡県西部健康福祉センター

Looking Back to the 4th Meeting of “Public Health Nursing Graduates”

Tomoyo SUZUKI*) Sanae WAKASUGI**) Toshiyuki MIYACHI***)
Teruyo NAKANO*) Kimie FUJIIU*) Shoko IRIE*)
Hideko NAKAMURA*) Mari TOMIYASU*)

* Department of Nursing, Seirei Christopher College

** Haibara Town Office

*** Selbu Public Health and Welfare Center

抄録

第4回「卒業生の保健師の集い」の報告は、「集い」の内容と共に、卒業生が活動発表をし、その後「集い」をふりかえたので、学びから「集い」の意義を再検討した。その結果、会発足当初の交流や情報交換の目的に加え、活動評価の場・保健師の専門能力の言語化の場という意義が見出され追加された。又、グループディスカッションを通して、発表した卒業生自身が気づかなかった援助視点をも、ふりかえることによって言語化されていた。さらに「集い」に参加した在学生への、具体的な保健師活動の教育という目的も追加された。

キーワード：卒業生・保健師・活動発表・「集い」の意義

I. はじめに

第4回「卒業生の保健師の集い」(以下、「集い」と略す)が平成16年3月13日(土)に行われた。平成12年度から本学の卒業生で、行政で働く保健師を中心として、各市区町村の情報交換、卒業生の交流を目的に年1回開催してきた。「集い」の今までの経過は、第1回目はグループインタビュー法を用いて卒業生保健師、特に行政で働く保健師の抱える課題とその対処の内容を抽出した¹⁾。第2回目はトピックス的な内容の講演と3分科会を設定し、話題提供を本学教員が担当した²⁾。第3回は講演と4分科会を実施し、分科会の話題提供は教員から卒業生へと移行した³⁾。そして今回の第4回目では講演と分科会方式は同様であるが、卒業生が話題提供というよりもテーマを持って活動をまとめたものを発表するという形をとった。今回の「集い」では、発足当初の交流や情報交換の目的に加えその意義が拡大されていると感じている。

そこで、第4回「集い」の内容を報告すると同時に、卒業生の活動発表内容や卒業生自身が「集い」での学びをふりかえることにより、更なる「集い」

の意義を見出していくことを今回の報告のもう一つの目的とした。

II. 第4回「集い」の概要

1. 全体構成

表1に示した通り、講演会と分科会を実施した。講演では現在の保健師の置かれている状況や保健師の役割、専門性が語られた。分科会は“保健師のかかわり”を共通テーマとし、地区組織活動の発表ではグループへの支援内容、母子保健活動・精神保健活動の発表では事例への支援内容であった。活動発表後グループメンバーでディスカッションを行なった。3分科会の準備や記録は、在学生ボランティア(3年次生8名)の協力を得た。

2. 参加者の概要

参加者は講演会が31名、第1分科会8名、第2分科会13名、第3分科会13名で、その内訳は表2に示した通りである。分科会参加者の特徴は、全てが静岡県内の保健師であり、活動の場は行政と産業であった。経験年数では3年以内は8名(47%)、4から7年が9名(53%)であった。

表1 第4回卒業生保健師の集いプログラム

時間	内容	講師・活動発表者
10:00~12:00	講演 「21世紀に求められる保健師の役割」	富士市福祉保健部保健福祉センター 湯澤まさみ 所長
13:30~16:30	分科会共通テーマ 「保健師の“かかわり”について考えてみよう」 第1分科会 「痴呆予防教室を地域の自主的なグループ活動に発展させていくための保健師のかかわり」について考えよう 第2分科会 「多機関で支えた育児能力の低い家族の支援 ―小児虐待のボーダーケースへの保健師のかかわり―」について考えよう 第3分科会 「精神障害者へのかかわり ―困難事例を通して―」について考えよう	<活動発表者> 榛原町役場健康福祉課健康づくり係 保健師 若杉早苗 <活動発表者> 浜松市保健福祉部健康増進課 保健師 長山ひかる <活動発表者> 西部健康福祉センター障害福祉課 保健師 宮地俊行

表2 分科会参加者の内訳・卒業生の経験年数

	第1分科会(8)	第2分科会(13)	第3分科会(13)
参加者内訳	* 静岡県内の市町村(4) ボランティア在學生(2) 地域看護教員(2)	* 静岡県内の市町村(7) ボランティア在學生(3) 地域看護教員(2) 母性看護教員(1)	* 静岡県内の市町村(1) * 静岡県の保健師(1) * 産業の保健師(4) ボランティア在學生(3) 地域の保健師(2) 地域看護教員(2)
経験年数	* 4年(1) 5年(2) 6年(1)	* 1年(2) 2年(1) 3年(2) 4年(2)	* 2年(2) 3年(1) 5年(2) 7年(1)

()人数

Ⅲ. 第1分科会の内容とふりかえり

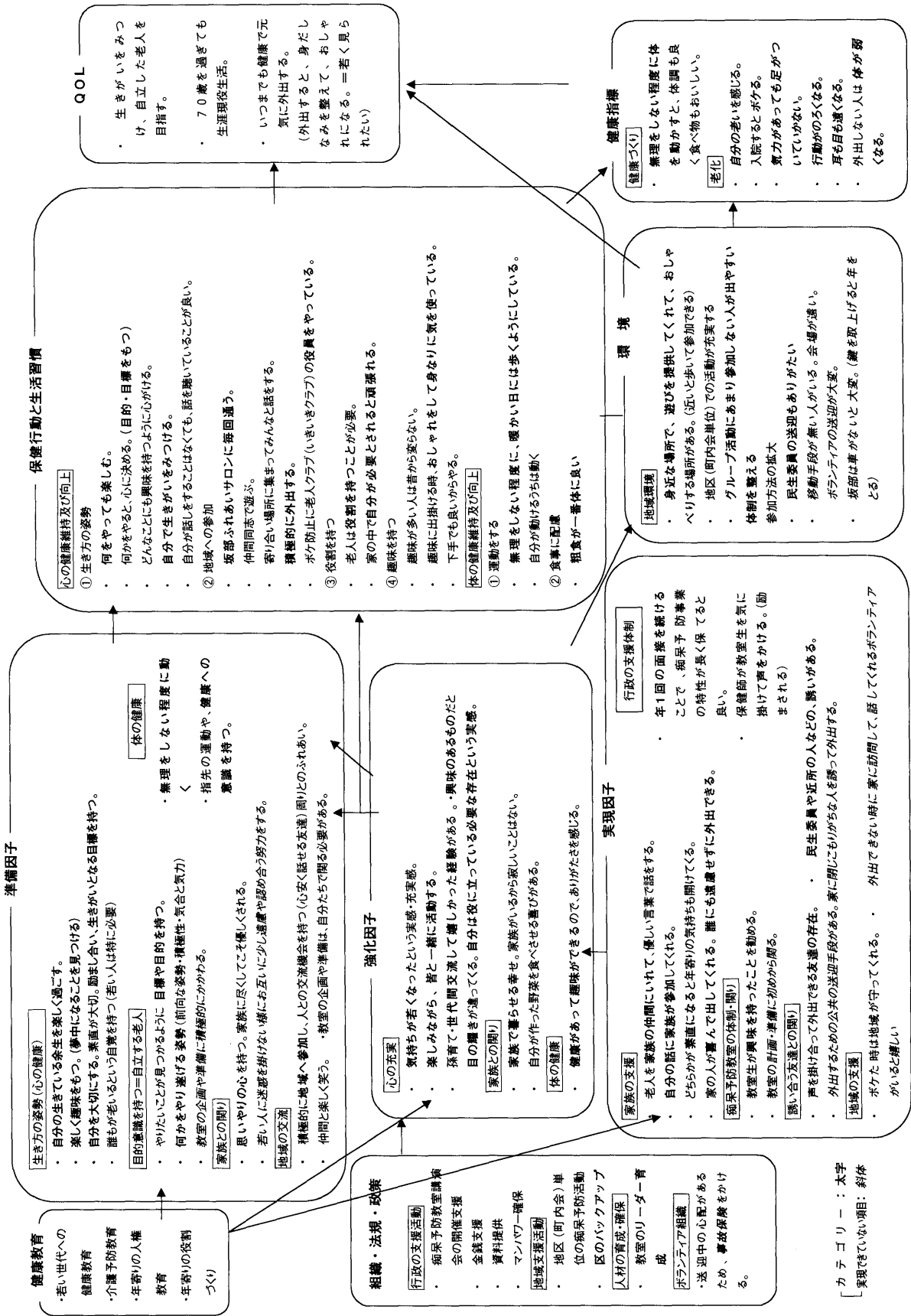
榛原町（平成16年人口総数25,018人）では、重点事業である「認知症重度化予防事業」の一貫として元気高齢者を対象とした「認知症予防教室」を実施し、日頃から自らの健康を自分で守るために“頼る”のではなく、自分たちの望む教室のカタチを考えてもらっている。

この「認知症予防教室」に参加している者及びその活動を支援している者が同じテーブルで話し合い、今後の介護予防事業の一助とするため、また地域全体で介護予防に取り組んでいくことを目的に、講演会を企画・実施した。講演会のディスカッションの記録を基に、地域をエンパワーメントしていくために、保健師の果たす役割をプリシード・プロシードモデルを活用し明確化したので「集い」で報告した。

1. 保健師活動内容

認知症予防教室生及び、教室活動を支援する各種団体を対象に、認知症予防講演会を平成16年2月15日（日）に榛原町坂部区民センターで開催した。講演会のテーマは「生きがいづくりの話し合い～高齢期を生き生きと過ごすために～」である。第1部は演劇「家族」を鑑賞し、第2部では生きがいづくりの話し合いをグループで行った。参加者は榛原町認知症重度化予防事業の「坂部ふれあいサロン教室生他」34名と認知症重度化予防事業を支援している団体の区評議委員、児童民生委員、ボランティアの方々64名、生きがいづくりの実践活動者の「おばあちゃん劇団ほのお」のメンバーである。グループディスカッションの内容をテープに録音し、逐語録を作成し重要アイテムを拾い出した。その後プリシード・プロシードモデルを活用してカテゴリーごとにまとめた（図1）。

図1 生きがいづくりP-Pモデル



2. 抽出された高齢者が地域で生きがいを持って暮らしていくために必要な内容

生きがいづくりの話し合い結果から、優先順位の高いと思われる内容は『生き方の姿勢』『地域への参加』『役割を持つ』『趣味を持つ』『健康でいること』『家族との関係』『友人の存在』の7つであった。

3. 保健師の役割として

生きがいづくりの話し合いを通じて、今後認知症重度化予防事業を発展させていく上に必要な、保健師の役割を個人へのアプローチと組織へのアプローチに分類し表3と4にまとめた。

表3 個人へのアプローチ

- ・ 個人の興味のあることを引きだし、趣味的活動につながるような働きかけ。
- ・ 教室の企画、運営、準備に教室生が積極的に関わることができるようなアプローチ方法の検討。
- ・ 認知症重度化予防教室の活動の中で、「生きがいや役割を持った生活の大切さ」についての教育、支援。
- ・ 教室生の心の健康づくりへの支援。
- ・ 教室の指導者や学級長になり得る人材の支援と育成。
- ・ 認知症予防事業の中で、教室生が自立できるようにするためのアプローチ方法の検討と、指導員、ボランティア等の関わり方の統一。
- ・ 個人の役割や特技を見つけ、気づかせることで個人の自己効力感を高めていく関わりの検討。

表4 組織へのアプローチ

- ・ 高齢者が身近な公民館でおしゃべり会等の集まりができるような、地域への提案と、関係機関等への働きかけ。
⇒ サロン活動の活発化
- ・ 認知症予防、介護予防に対して関心が高まるよう、全てのライフステージを対象に啓発をする。
⇒ 若年層（40歳代）をターゲットにした認知症予防活動の充実
- ・ 地域事業の立ち上げや活性化における、必要な時に保健師等が支援できる体制を整備する。
⇒ 認知症予防教室立ち上げマニュアル作成
- ・ 行政の関係各課が連携を図り、地域の活性化における望ましい体制を検討する。
⇒ 町の保健計画に盛り込む

4. 「集い」のふりかえりと今後の保健師活動の課題として考えたこと

地域のニーズに適した保健活動を展開しているつもりでも、自分たちの働きかけた保健指導がどのくらい町民の求めるカタチに合致しているかをふりかえる機会が少なく、本当に高齢者(町民)が求める保健事業になっているかを確認することが通常の業務で中々できないことが悩みである。今回「集い」での活動発表を通して、事業を評価し、客観的な視点で活動をふりかえり、自分の関わりを再確認する機会となったことが大きな成果である。また、今自分が大切に実施している保健事業を報告することで町の事業のPRができたことも嬉しかった。

報告内容をまとめる中で、事業評価として、①生きがいに必要な要素である、『地域への参加』『仲間(友人)の存在』『趣味』『役割』等が抽出されたことは、認知症予防教室の中で重要となる、“自らの求める姿を達成するために必要な意識”を住民が獲得できている結果であり、保健活動で地域のエンパワーメントが増した効果である。②また、住民のディスカッションを通し、教室生と教室活動を支援する人々が、地域ぐるみで“生きがいにづくり”をすることへの共通認識を持つことができたこと。③地域で生き生きと暮らすために必要な保健師の担う役割を明確化でき、個人へのアプローチの他に地域の組織づくり(地固め)をコーディネートする事の大切さやポイントを再確認することができた。

「集い」を終えて考えることは、これから迎える高齢化社会では、全ての介護予防事業を町や保健師主導で実施していくことには限界がある。そのため、保健師は地域の求めるニーズを常に認識しつつ、効果的に働きかけていくことで、地域の役割を考えるきっかけとなり、自ら、

地域を健康にしていこうという気持ちをエンパワメントすることができると考える。

そして、今後も認知症予防教室生が“活動的な85歳”でいるために、自らの生きがいにづくりに積極的に取り組み、地域全体でヘルスプロモーションを推進して行くことが必要であると考え。尚、「集い」で報告した「認知症予防講演会」の結果は、保健師の役割をより明確化し平成16年度静岡県公衆衛生研究会にて発表する予定である。

毎年、聖隷クリストファー大学看護学部の教員により開催される「集い」では、日々接する仕事の同僚や上司と異なり、かつて一緒に学んだ「仲間」と話せる安心感や、自分の悩みや、苦勞、愚痴等を素直に話せる機会にもなり、この会に参加することで、「これからも保健師として頑張っていこう」という気持ちをエンパワメントされていると感じる。

*平成16年12月24日付け老発第1224001号により通達された「痴呆」に替わる用語についてを基に、「痴呆予防」を「認知症予防」に変更して掲載。

Ⅳ. 第3分科会の内容とふりかえり

1. 事例の紹介

58歳の男性、病名は、統合失調症(27歳から)糖尿病(40歳頃から)。父親、継母(実母が幼少期に死亡したため後妻)、弟(後妻の息子)の4人暮らしをしていたが、平成11年(本人54歳時)父親が死亡し、母親と弟は別の町にアパートを借りて生活するようになったため、家族で住んでいた一軒家で単身生活を始める。以前から弟、継母との折り合いが悪くいつも孤立していた。現在、弟とはほとんど連絡を取っていない。制度は通院医療費公費負担制度、精神保健福祉手帳(3級)、障害年金(3級)を利用

している。

これまでの経過は、高校卒業後、一般企業に入社し夜間の大学にも通いはじめる。会社の同僚とトラブルを起こし暴力を振るったため解雇され、その後ブラブラした生活を送る。また、会社を解雇されてから1年後位から首吊り、服毒など自傷行為あり、家からいなくなり家族が探すことも何回かあった。継母に対して暴力を振るうこともあり、仕事は家の農業を手伝って過ごしていた。昭和41年（19歳）幻聴、被害妄想等出現し、精神科を受診する。症状は一度は落ち着いたが昭和47年（25歳）再び病状が悪化し、入退院を繰り返すようになる。昭和50年頃（30歳）継母より保健所に相談があり、精神保健相談、家庭訪問、面接（本人、継母）等で状況把握を行い、適宜助言を行っていた。現在まで約10回の入院歴があり、最終入院は平成5年頃（2ヶ月間程度）である。平成11年からは1人暮らしを始め、2週間に1度通院し内服治療

をしている。現在、幻覚妄想はなく、対人関係も特に問題はなく、落ち着いて農作業をして生活する事ができている。農協や周囲の農家との付き合いもできている。平成6年頃（40歳台）から糖尿病を指摘され1ヶ月に1度通院中であり、血糖降下薬を朝1錠内服している。空腹時血糖値は140から150mg/dl台である。単身生活を始めてから食事は自分で作っている。平成8年（51歳）より保健所デイケア参加し始め、現在月2回行われているデイケアにはほとんど休まず参加している。リーダー的な存在であり、積極的にみんなの意見をまとめている。

2. 保健師としての自分のかかわり

自分がかかわった平成15年4月から12月までのかかわりを三期に分けその時の判断、思った事を表5から7にまとめた。

表5 第一期 導入期の関わり：デイケア場面での関わりを中心に（平成16年4月から9月頃）

	本人の状況・関わり	判断・思ったこと
第一期	<p>デイケアにて初めて本人と会う。話の受け答えもしっかりとでき、家族の事や病気の事について色々積極的に話してくれる。デイケアでは他のメンバーに声をかけ意見をまとめる役割を果たしてくれている。農作業は今は忙しくないためデイケアはいつも参加できるとのこと。</p> <p>糖尿病については、血糖値、HbA1cなど、一般的な知識は持っている。血糖値は最近200台まであがることもあるという。最近目が見えにくくなってきたような気がするというも、診察の結果は異常なしとのこと。食事は自分で作っているが農作業で疲れたときは出来合いのものを買ってきてしまう事も多い。食事は食べたり食べなかったり。食事も気にしてはいるというが、つい食べ過ぎてしまう事がある、と言う。地域で行なっている糖尿病予防教室にも参加している。</p> <p>デイケアの調理実習の時に、適度な量を分量で分かるように自分のお皿の盛り付けを自分でするようにして、残った分は持って帰るようにする事とする。本人も了解、実行する。</p>	<p>デイケアのリーダー的な役割を果たしてくれている。自分の意見もしっかりと言え、非常にしっかりしている。農作業も一人でこなしていてすごいと思うし、農協や他の農家との付き合いも大変だと思うけど、能力も高いしやっつけていけるのだろう。</p> <p>血糖値が大分高く、本人も高い事は気にしている。合併症の事も心配している様子。知識、能力があるにもかかわらず、食生活のコントロールができないのは具体的な方法を知らないからかもしれない。一人暮らしで、年齢的にも食品分類表を使う事は難しいと考えられるため、少しでも方法を覚えるようになればコントロールできるようになるのではないかと。デイケアでの調理実習の機会を利用して本人に教育してみたらどうだろうか。</p>

表6 第二期 関わりの変化：生活場面をからケースをみて（平成15年10月から12月頃）

	本人の状況・関わり	判断・思ったこと
第一期	<p>デイケア参加時、自分で作ったお弁当を持っていくようになる。おかずは卵焼き、野菜炒め、御飯少量。一品の時もあり、ほとんど毎回同じおかずである。状況確認のため訪問をする。家の周囲に広い田畑がある。家の中は掃除もあまりしないということで埃がたまっている。居間は乱雑ではないが、殺風景。(物があまりない) 台所は調味料やフライパン等の調理器具、食器が雑然と置かれている。</p> <p>本人も「汚いけど一人暮らしだもんで…」と言う。料理も自分でやってもいつも同じメニューになってしまい買って来たほうが楽だから、つい買ってきてしまい、お酒も一緒に買ってきてしまい飲んでしまうこともあると言う。「体に良くないのはわかってるんだけどね」とのこと。ヘルパー導入という方法があることを説明すると、他人が家に入る事への不安はあるが、このままではいけないという思いもあり、やってみたいとのこと。</p>	<p>お弁当作ってきたりして本人なりに色々工夫していると思う。でも、おかずの品数や種類が少ない。これでは長続きしないかもしれない。料理の工夫の仕方がわからないのだらうか。デイケアの調理実習では色々調味料を使ったり、食材を買ってきたりするけど、それを自分の家で実行するのは無理だと思う。どんな感じで料理しているのか、台所の様子など一度見に行こう。</p> <p>(訪問後)</p> <p>やはりあの状態では自分で料理するより買って来てしまう方がいいと思ってしまうだろう。買いに行くと、つい好きなお酒に手が出てしまう気持ちも分かる。ホームヘルプサービスを利用する事で一緒に料理をしていく事ができれば、手元にある材料でどのように料理すればいいか分かるようになり、他人が入る事により本人の励みになるかもしれない。</p>

表7 第三期 連携の中での関わり：ヘルパーとの協働（平成16年12月頃）

	本人の状況・関わり	判断・思ったこと
第三期	<p>ケア会議開催後ホームヘルプサービス利用開始。毎週一回、一時間半。畑でとれる野菜を中心にヘルパーと本人と一緒に調理をする。一回で三日間ぐらいの食事を作り、それを何回かに分けて食べるようにする。最初は戸惑いがあり、他人が家に入る事に気を使いすぎてしまいストレスを感じている様子との報告を受けたが、最近はヘルパーが来る前に畑から野菜をとり調理しやすいように下ごしらえをするようになる。本人も大分慣れてきたという。</p>	<p>最初は戸惑いもあっただろうけど、少しずつ状況にもなれてきて良かった。まだ、始めたばかりだから、これから本人にとってどんな方法がいいのかまた一緒に考えていく事にしよう。</p>

3. まとめ

1) 自分の学び（かかわりの変化とその要因）

第一期では、本人の能力が高いと考えられたため、デイケアの場面において目分量で食事の適切な量がわかり、それを家で実行する事ができるような支援を行なった。第二期では、第一期の支援を受けて、本人は食事の量を少なくする必要性が分かりお弁当を持って来るなど積極的に努力する姿勢が見られたが、おかずの種類の少なさや、いつも同じようなおかずを持って来るなど、具体的な料理の方法がわからないのではないかと考えられた。実際どのような環境で食事を作っているのかを見る必要があると判断したため、訪問を行なった。その結果、食事を作る環境が整っていない事、食事を買に行ってしまう事、一緒にアルコールを買ってしまうなどの状況が分かった。また、広い家の中で、一人で調理して食べる事は、評価してくれる人もいないため本人にとっても苦痛が強く長続きしないのではないかと考えられたため、ホームヘルパー導入について提案し本人も了解した。第三期では実際にヘルパーを導入して、初めは戸惑いもあったが、少しずつ慣れてきて本人もヘルパーと一緒に頑張っているという状況である。

事例をまとめる事により、その時、その時の支援者としての自分の考え、思いを確認でき、結果としてどのような援助につながっていったのかを知ることができた。本事例では当初は、仕事もしていて、一人で生活ができていたという本人の能力を考えると、ヘルパー導入の必要を強く感じてはいなかったが、かかわっていくうちに次第に本人の「分かってはいるけれど変えられない生活」について理解をする事ができ、ヘルパーの導入を決定することになった。また、ホームヘルプサービス導入による支援が必要と

判断した第二期において訪問によって得た情報が大きく、振り返ってみると訪問を行なった事が非常に重要であったことが確認できた。

2) 「集い」を通しての自分の学び

ディスカッションを通して、参加者から様々な意見を聞く事ができ、自分の今まで見ていた視点と異なる視点から事例を見る事ができた。意見の中で本人の経済的な状況についての情報が少ない事に気付かされた。預貯金の額がいくらあるのか等は、今後自己負担の事や将来的に施設等を考えた時に必要になってくる情報であるが、本人に経済的なことを聞く事に対して自分の中で抵抗があったように思う。経済状況を聞くという事は、本人のプライバシーにかかわるため聞きにくい面もあるが、支援のために必要であるという事を伝え情報を収集していくと、技術的な面においても学習することができた。

また、単に糖尿病をもつ成人男性に対する援助ではなく、精神疾患のために長年入退院を繰り返した結果、社会経験、生活体験が少なく、生活環境を整える事が難しいという視点を持って、援助を行なう事が重要であるという事を再認識した。糖尿病に対する教育だけでなく食生活を含めた生活全体を支援するということが重要であったと思う。生活能力は十分にあると考えられたので、ホームヘルプサービスを利用する事によって依存的になるのではなく一緒に食事の準備や片づけをし、生活環境を整えていく事が出来るようになってきたのではないかとと思う。

本事例は、かかわりのきっかけが保健所デイケアであったため、自分が中心となって支援を行ってきた。ディスカッションの中で、今後どのように市町村に引継ぎをしていくのかを考

えていく必要があるとの助言を受けた。居宅支援の中心が市町村に移行している現在、保健所としての役割を十分に認識して支援を行なう事によって、より効率的にサービスを提供できるのではないかと気付く事ができた。今後どのように市町村と協働して対応していくのかは、自分にとって大きな課題であると感じた。

最後に、事例をまとめて報告をする事により、自分にとって事例とのかかわりの流れを再確認する事ができ、貴重な学習の場になったと思う。

V. 在学生ボランティアの学び

ボランティア学生の「集い」後のアンケート内容を表8にまとめた。感想は大きく保健師の『活動の理解』と『援助技術の理解』の保健師そのものに対する理解に加え、自分自身の中にある『職業人としての自覚』に分類された。

VI. 「集い」の意義

今回の「集い」では事例の状況より1名の紙面発表はできなかったが、2名が“保健師のかかわり”をテーマに活動を発表し、その後「集い」をふりかえった。活動をまとめるということは評価することであり、自分のかかわりをふりかえることであると2名とも述べている。問題が地域住民に共通の問題として認識されることからコミュニティーのエンパワメント・プロセスが始まる⁴⁾とされているが、まさに分科会1はコミュニティーのエンパワメント・プロセスそのものであり、重要な保健師の役割をプリシードプロシードモデル⁵⁾を使い分析し明確にした内容であった。本学ではプリシード・プロシードモデルを取り入れているが、それを具体的な活動に活用できたことは、理論と実践とが一致

した結果である。分科会3では、自分のかかわりの変化を三つの時期に分け分析している。常に自分が事例と正面からかかわり、生活を見据え判断し最も適したサービス部門に引き継ぎ見守っていく、つまり保健師の中堅期の専門能力である個別事例の支援に必要なケアチームを編成し対応⁶⁾することが出来ていた。さらに保健所の役割である市町村への支援にも考えが至っている。在学生ボランティアへの影響は、保健師の活動理解に留まらず、専門性の具体的な理解、さらに保健師という職業の認識、職業人としての決意にもつながり、その波及効果に驚いている。

今回の「集い」では本文中の下線部分に見られるように交流、情報交換の目的に加え活動評価の場・保健師の専門能力の言語化の場という意義が見出され追加された。そして「集い」でのディスカッションを通して、発表した卒業生が気づかなかった援助視点をもふりかえることによって言語化していた。さらに、卒業生の姿を見ることによって在学生の具体的な保健師活動教育と職業人教育という目的も追加された。

一面継続性という視点でみると出席者に継続者が少なく年1回という状況もありテーマを継続させて学びを積み重ねたいとの大学側の意図は難しい状況であるが、今後の検討課題としたい。さらに卒業生の企画への参加について検討する必要もあると考えている。今後どのようにこの会が発展するのか、毎年「集い」を振り返り評価し、卒業生と大学側との協働により創りあげていくことが今後は大切であると感じている。

参考文献

- 1) 鈴木知代、入江晶子、式守晴子、仲村秀子、中野照代、藤生君江（2001）：行政で働く卒業生（保健婦・保健士）の抱える課題と対処. 聖隷クリストファー看護大学紀要, 9, 1-13.
- 2) 鈴木知代、中野照代、藤生君江、入江晶子、仲村秀子、木下幸代、式守晴子（2003）：第2回「卒業生の保健師の集い」をふりかえって. 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, 11, 169-178.
- 3) 仲村秀子、鈴木知代、中野照代、藤生君江、入江晶子（2004）：第3回「卒業生の保健師の集い」をふりかえって. 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, 12, 187-195.
- 4) 麻原きよみ（2000）：エンパワメントと保健活動エンパワメント概念を用い保健婦活動を読み解く. 保健婦雑誌, 56（13）, 1120-1125.
- 5) ローレンスW・グリーン、マーシャルW.クローター（訳神馬征峰他）（1997）：ヘルスプロモーションPRECEDE-PROCEEDモデルによる活動展開. 医学書院, 東京.
- 6) 社会保険実務研究所（2003）：週刊保健衛生ニュース, 第1228号, 41.